

# 悪魔と鞄持ちの契約

キノコ胞子

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

魔法少女まどか☆マギカ 「新編」 叛逆の物語

の後のお話。

学校に来なくなつた暁美ほむらを見かねた美樹さやかはほむらの居場所を突き止め  
る。という所から始まります。

悪魔と鞄持ちの契約

目

次



## 悪魔と鞄持ちの契約

「世界をねじ曲げた悪魔様がこんなところでなーにしてんのさ」

ひどく軋む扉に寄りかかり、軽口を発する美樹さやか。

それを、当の悪魔、暁美ほむらは無機質な目で睨む。

ただ、その悪魔は気だるげに椅子に座り、万全ではない様子。

「なんのよう？」

「そんな冷たい目でみないでよ」

そういうと、隙間から入り込む夕焼けに照らされた椅子に座る。

悪魔は自らに対面するように座つた敵、円環の理の鞄持ちをじつと見つめる。

「・・・」

所々隙間があいた木造の壁から風が吹き抜ける。

「まあ、ドリンクくらい出して上げるわ」

悪魔が手を叩こうとするが、手のひらを合わせる前に缶コーヒーが投げ込まれる。

「・・・どういうつもり？」

「それはあんたが一番分かつてんでしょ？」

ね？とさやかは肩をすくめる。

「で、何しにきたのよ？、その様子じや、記憶も戻つてゐるわね」

アメジスト色の瞳に生気が戻る。

「殺しあいをしに来たのかしら？」

ビリビリと大気が揺れる。

しかし、そんな中を美樹さやかは余裕綽々とした様子でコーヒーをすする。

「それは、あんたも望んでないことでしょ？」

にがつとさやかは顔をしかめる。

「私はいつでもいいのよ？」

はあとさやかがため息を漏らした刹那、

輝かしい青色の閃光が部屋を包み込み、ほむらの首にはサーベルがあてられていた  
「あたしの力を押さえ込めもしないくらい弱つてゐる癖に」

魔法少女の姿をした美樹さやかはまつたく…と言つた様子。

「貴女…その姿…」

「さすがのあんたも予想外だつたか」

暁美ほむらは美樹さやかが記憶を取り戻すことまでは予測していた。だが、今の魔法

少女姿の美樹さやかの頭には、人魚の魔女の顔を模した兜、いつもの露出が多い服ではなく甲冑を所々に纏っていた。

纏う魔力の質も美樹さやかのモノではなく。いつか感じた、そう、恋慕の魔女にそつくりだった。

「オクタヴィアは召還できないけど、漏れだした魔女の力があたしに干渉してると一ね」

暁美ほむらは美樹さやかを睨む。

「そこまで弱ってるなんて、自分でも予想外だつた？」

再び青の閃光が部屋を満たし、椅子には制服姿の美樹さやかが座つていた。

「あら、チャンスじゃない。いまなら、私を殺せるかもよ？」

と暁美ほむらは挑発的な笑みを浮かべる。

「・・・そうしたいけど、できないんだよね」

？と悪魔は首をかしげる

「まどかに怒られちやうからさ、まあつまり円環の理にね」

悪魔は怪訝に睨む

「それに、まどかは魔法少女にならなければ今のような人生を送つてたんだし、全てを背負う女神様には少しでも楽しんでもらつてもいいかなってね」

椅子から立ち上がり部屋を歩き回る。

「あんたがここまで弱つたのは、度々起きるまどかの覚醒を押さえてるからでしょ？」

「そうね」

と悪魔は同意する。

「しかもそれは、あんたがまどかの近くにいればいるほど頻度が増す。だから学校に来れないくらいに弱つて、あんたはこんな山小屋に籠つたわけだ」

割れた窓から見滝原の町を眺める

「あんたの自宅じゃあ、まどかが必ずお見舞いに来るからね」

さやかはこの幸せ者めとほむらのおでこをつつこうとするもかなりの握力で手首を握られる。

痛い痛いとさやかはほむらの手首を叩く。

「で、結局なにをしにきたの？」

ほむらはパッと手首を話した。

「交渉だよ」

「交渉？私の知っている美樹さやかにはそんな芸当出来ないわよ」

むつとさやかは眉間にひくつかせる。

「…はいはい」

「で、どういう交渉なのかしら」

美樹さやかは椅子に再び座る。

「まどかが人間としての生を全うするまで、それまではあんたが円環の理の力を押さえ込むのに協力してあげる」

はあ？と悪魔

「なぜ？ 円環の鞄持ち様がそんなことを…」

「さつき言つたよね。女神様には幸せな時間も必要でしょ」

「で、私は何をすればいいのかしら」

「まどかの側にいること」

「…え？」

「どういうこと？」とほむらは動搖する。

だーかーらーとさやかは続ける。

「ま・ど・かの側にいること、わかつた？」

「…でもそれじやあ、覚醒が…」

「そのためにあたしが協力するんでしょーが。頭も弱つてるな、あんた。」

さやかはポリポリと頭を搔く。

「うちの女神様…。いや、あんたが守り抜いた『鹿目まどか』の幸福はあんた抜きでは成

り立たないのさ。」

はあ…。と 息を吐き続ける。

「そして、それは…。あんたが悪魔になろうが、女神を引き裂こうが変わらないんだよ…。」

さやかは見逃さなかつた悪魔の瞳に涙が溜まるのを。

枯れきつたもんじやないね。と心で呟きながら続ける。

「続きを見なよ。あの『夢』のさ」

悪魔は顔を伏せる

「美樹さやか…貴女は…それでいいの？」

先程よりも弱つた声を背にさやかは椅子から立ち上がり、小屋のドアを開ける。

「まーねーじやあ、明日学校で」

小屋から出る直後、「愚かだわ」とほむらが溢す。

「まつたく」

と呟き美樹さやかは山から見下ろしていくた見滝原の町に向かつて山を下り始めた。

最後の愚かは誰に向けられたものかを哀れみながら。